

## じいちゃんの想い ～繋ぐ私の夢～

京都府立農芸高等学校 農産バイオ科 3年 宅間 加鈴

高校3年生になった私。進路に悩んでいたある日、母親から聞いた「じいちゃん、牛舎たたもうと思ってんねんで…」という話。今の私には、どうしてもその言葉を聞き流すことはできなかった。雷に打たれたかのような衝撃。今まで経験してきた点と点が、ひとつの線として繋がったかのような感覚だった。

じいちゃんは、京都亀岡の地で約120頭の和牛を飼養し、亀岡牛を生産する農家。しかし、気付けばもう79歳。決して若いとは言えないその年齢に加え、昨年から続くガンの治療。また、後継ぎもない現状が、じいちゃんを苦しめ悩ませていた。幼い頃、どんな日でも毎日牛舎に通うじいちゃんを変人だと思っていた。動物は好きだったが、牛はデカくて怖くて臭いし、どこか違うと思っていた。じいちゃんも牛も少し煙たい存在だったのだ。一緒に住んでいたわけでもない。どこか遊びに行ったり、一緒にご飯を食べた記憶もほとんどないし、これといった思い出は特にない。それなのに、母親から聞いた話が頭から離れなかった。

現在私は、京都府立農芸高等学校に通い、畜産コースで主に乳牛の飼養管理や生態について学んでいる。幼い頃から抱いていた「動物が好き」という想いは、農芸高校への進学を後押しし、私に酪農と出会うきっかけをくれた。また、どうせ続かないと思って入部した畜産部だったが、気付けば3年目。今では部長として、17人の仲間と共に、「365日の徹底した飼養管理」をテーマに今日も牛の管理と搾乳を行う。目を閉じて考えてみると、幼い頃の私には想像できなかったこの状況に、ふと笑みがこぼれた。部長になったのは2年生の途中から。人見知りで、他人とコミュニケーションを取ることが苦手だった私が、チームのリーダーとなったのだ。それは順調に進むはずもなく、意見の食い違いで衝突し、思い悩むこともあった。すべてがイヤになって投げ出したいと思った日、泣き叫んだ日もあった。それでも必死にもがいて毎日牛舎に通い、大好きな牛たちのために、必死で作業を行った。牛舎で過ごした日々は、私自身を強く成長させてくれた。この牛舎には私の高校生活のすべてが詰まっている。

畜産部に入部した当初、私が想像していた酪農は、牛にエサをあげ、搾乳するだけの単純なものだと思っていた。しかし、実際は全く違い、知れば知るほど魅力に溢れ、深いものだった。特に繁殖に興味を持った。分娩による新たな出会いにはぬくもりがあり、いつ見ても感動した。家畜もひとつの命だった。しかし、ペットではない。生産性や利益を上げていくため、出荷や淘汰は当たり前。私は出荷や不慮の事故による別れを何度も経験し、たくさんの命のめぐりを見てきた。多くの命が繋がって、ここにいる牛は今日もミルクを

搾れていることを知った。中でもファーストという牛の最期は印象深い。搾乳牛舎で体と足を柵に挟み、立てなくなったあの日から、日々やせ細っていく体と硬直して曲がらない脚。共進会で華々しい結果を残し、一目置かれた存在だった一番大きな体にその面影はなく、小さくなる命の灯火に現実を突きつけられる。安楽死は絶対にせず、回復を願い見守ったが、立てなくなって51日目、牛舎にファーストの姿はなかった。いつかその日は来ると思っていたけれど、命の儚さを痛感し、何ともいえない気持ちになった。しかしファーストの死は、酪農家には命を扱う者としての使命や責任があることを私に教えてくれた。

農芸高校は酪農教育ファームとして認可を得ており、地域の方々に牛舎見学の受け入れをしている。授業や部活動の中で、何度か取り組みをしてきた。酪農を知らない人たちに牛の事を説明するのは難しい。でも特に、子どもたちが牛に触れあい「楽しい」「可愛い」などと言ってくれたこと、何よりその笑顔が嬉しかった。こうした経験や活動の積み重ねから、私にはある想いが芽生えてきた。「酪農の魅力をより多くの人に伝えたい…！」ある日、SNSで見た牛の分娩の写真。そこには生命力が詰まっており、強いメッセージ性に衝撃を受けた。私の趣味は写真を撮ることで、スマホのフォルダには1万枚を超える数え切れないほどの牛たちの写真がある。撮りためた写真を使い、伝えるために何かできないか。酪農教育ファーム・子ども・写真・SNS…もっと多くの人に牛舎へ訪れてもらい、実際に見て・触れて、ぬくもりを感じてほしい。酪農教育ファームの持つ発信力と可能性は計り知れないと感じる。「酪農教育ファーム×写真」。私が撮影した写真で、命のぬくもりや酪農の持つ魅力を伝えることができたなら…将来は消費者に命のぬくもりを届け、酪農の魅力を伝えられる、そんな酪農家になりたい。漠然とした夢ができた。

そんな時に飛び込んできたじいちゃんの閉業の話。何かに突き動かされ、いてもたってもいられなくて、じいちゃんのところへ行った。「誰にも迷惑をかけたくないから牛舎は閉める。」初めて聞いたじいちゃんの本音。悲観的な話のはずなのに、なぜか私の目は輝いていた。今なら分かる気がする。牛1頭1頭には想いや願いが込められており、いくつもの命が繋がっているということ。牛舎には、その人の人生そのものが投影されているということ。じいちゃんの想いがたくさん詰まった牛たちと牛舎を、ここで絶やすわけにはいかない…。「私に継がせてほしい！」勢いに任せ、言ってしまった。でも、「4年も待ってられるか分からないけど、規模を縮小してでも牛舎は置いておく」とじいちゃんは言ってくれた。漠然とした夢は将来の確固たる目標へと変わった。この時私は、大学でより専門的に勉強し、ちゃんと任せてもらえるように成長すると誓った。

私はじいちゃんの牛舎を、牛の持つ魅力を伝え、発信できるところにしたいと考えている。酪農教育ファームの認証農場として地域の子どもたちを受け入れるだけでなく、SNSを使い継続的に写真を投稿することで、牛舎に足を運ばない人たちにも牛を身近なものとして

感じてもらいたい。昨今の畜産業界は高齢化が進み、飼養戸数の減少が危惧されている。また、肥育素牛の供給が追いついていないことによる子牛価格の高騰が進んでいるのが現状だ。私は京都の次世代の畜産を担う存在として、乳肉複合経営というものに取り組みたい。じいちゃんの和牛はそのままに、徐々に乳牛を導入していき、自分の理想とする酪農経営を行いたい。最大の目標は、じいちゃんと一緒に経営をすること。その目標を実現させるため大学に進学し、経営学をしっかりと学びたいと考える。また、乳牛と和牛とでは飼い方が異なるため、飼養学にも力を入れたい。じいちゃんと定期的に電話をし、情報を聞くだけでなく、他愛もない会話をする。長期休暇中は牛舎に行き、作業の手伝いをする。じいちゃんの想いをもっと知ることができると思う。

「じいちゃん、もう少し待ってね。」2人の想いを繋ぎ合わせ、1つの夢を形にする。私はたくさんの想いを繋ぎ、ぬくもりを発信していけるような酪農家を目指す。

ご本人による朗読を  
こちらからお聴きになれます。

